

トンレサップ水系セン川下流域氾濫原の地形発達 Floodplain development along the lower Stung Sen River, the Tonle Sap tributary

南雲 直子^{1*}, 須貝 俊彦¹, 久保 純子²
Naoko Nagumo^{1*}, Toshihiko Sugai¹, Sumiko KUBO²

¹ 東京大学大学院新領域創成科学研究科, ² 早稲田大学教育学部

¹Graduate School of Frontier Sciences, University of Tokyo, ²School of Education, Waseda University

カンボジア中央部を流下するセン川はトンレサップ水系最大の支流であり、モンスーンの影響を受けるために流域の水文・地形環境は季節ごとに大きく変化する。空中写真判読により、下流域に発達する氾濫原の地形は蛇行する現河道沿いに発達するメアンダーベルトと後背湿地に大別されることがわかった。下流域に位置するコンボンチューティアルおよびコンボントムの2地点で河道沿いの露頭観察と6本の堆積物コアの観察・分析をおこなった結果、氾濫原の環境は11 ka頃に変化し、コンボンチューティアル付近では砂層が広く堆積する一方、下流側のコンボントム付近では有機物が多く含まれる様子が観察された。これはおそらく、完新世における夏季モンスーンの強化によって降水量が増加したことや、トンレサップ湖の出現に起因する。また、現在観察されるようなメアンダーベルトと後背湿地からなる氾濫原の地形は、雨季のトンレサップ川の逆流現象の開始とともに、5.5 ka頃に形成されたと考えられる。メアンダーベルトの堆積物は蛇行流路の移動に伴い、数十年から数百年単位で入れ替わる一方、後背湿地では少なくとも約36 ka以降0.1 mm/yrの速さで泥質な堆積物の累重が続き、完新世には0.5 mm/yrに増加した。このように、セン川氾濫原の地形発達にはモンスーン強度の変化と、最下流部に位置するトンレサップ湖の水位変化が影響していると考えられる。

キーワード: 氾濫原, ボーリングコア, トンレサップ湖, メコン川, カンボジア

Keywords: floodplain, drill core, Lake Tonle Sap, Mekong River, Cambodia